

シュな先生で、論文も相当書かれていた。英語の文献を次々読みこなし、レポートを書くように投稿論文を書きあげている様子を横で見ている、母国語で研究できることを心底うらやましく思った。

英語とドイツ語

杉田 孝夫

英語との出会いは、小学5年のころ、岩手の小さな町のバプティスト教会の日曜学校の英語教室に誘われて通いはじめたときが、英語との出会いの最初であったように思う。アメリカ人の宣教師の奥さんが、子供達にサルの絵を見せながらマンキー、マンキーと言うのを復唱したことをよく覚えている。最初に覚えた英単語がこのマンキーだったかもしれない。しかし英語よりも、毎週教会に行くとかける絵入りの聖書の一節を記したリーフレットに異国を感じ、奥さんが食べさせてくれる手製のケーキにアメリカへの憧れを抱いたことのほうが記憶に残っている。

中学になれば英語を勉強することになる。私はNHKのラジオの基礎英語と続基礎英語を一年ずつ聞いて、そのあと英語会話を1年間聞いたが、どの程度効果があったのかは覚えていない。それで英語ができるようになったという気分には全然ならなかったし試験の結果がよくなったようにも思えないので、たいした効果はなかったのだろう。英語を勉強しているという事自体に満足感を感じていたのかもしれない。

高校にはいって、やたらに細かい文法の先生と疎に解説をしない講読の先生のリズムについていけなくなって、すっかり英語嫌いになってしまった。嫌いだからといって勉強しないわけにもいかないから勉強はするが、熱がはいらないから結果はよくない。ますます嫌になっていった。

大学に入って、これで点を取るための勉強をしなくていいのだと思うと、天国にいるような気分だった。それほど受験勉強が嫌いになっていた。西洋史を専攻しようと思っていたので、とにかく英語の本を読めるようになりたいと思い、ペンギンブックスを買って読みはじめた。ヘミングウェイの『誰がために鐘は鳴る』が一冊を最後まで読みとおした最初の小説だった。3年のころにはE.H.カーの『歴史とはなにか』を外国書講読の時間に読んだ。4年のころには、卒論のための英語の専門書を何冊か読んでいた。でもドイツ現代史をやっているのにもっぱら英語の文献に頼っているようでは本物ではないと思いつつ、ドイツ語がさっぱり読めないのでいらいらして過ごしていたように思う。

学部を卒業してから一年間、指導教官にピンソンのドイツ近代史を逐語訳しろといわれ、愚直にも一年間、800ページもある大著を全部訳した。レポート用紙が10センチ以上の厚さになった。こんな課題を出す方も出す方だが、それをその通りやる方も相当どうかしている。しかしそのおかげか、英語の本を読むことは随分楽になった。しかしますますドイツ語からの逃避傾向が強くなったように思う。

ドイツ史をやろうと思ったのは、そんなにしっかりした理由があったわけではない。第二外国語にドイツ語を選んだので、ドイツ史になってしまった。ドイツ語を選択したのは、きっとその当時読んでいた本の影響だろう。1960年代から1970年代にかけての読書の世界は、まだまだ大正教養主義を基礎に育った知識人たちの書物が圧倒的に多かった。教わる先生たちも半数は旧制高等学校、旧帝大卒で、戦後の語学教育は話にならんといいことをよく聞かされた。それで考えたのは、学部の4年を旧制高校、修士課程を旧制度大学、博士課程を旧制大学院とずらして考えて、

到達水準を自分で設定して、勉強すればいいのではないかと強がってみたりした。その後の半生を、あとから振り返ると、その通りの過ごし方をすこしのんびりとやったような感じがする。

もっとも私が指導教官に選んだ先生たちは、学部でも大学院でも旧制から新制に切り替わる頃に高校や大学に入った人達だった。かれらはそろって、フランス、イギリス志向だった。だから「君は随分古いね」とよく言われた。複雑な気分であった。卒論は同輩や先輩は革命的な話を主題にするので、ナチズムを選んだという具合で、そのころからへそ曲がり癖が強かったようだ。

ただナチズムを選んだのには、もっともらしい理由がないことはない。一つはフランクルの『夜と霧』を読み、丸山眞男の『現代政治の思想と行動』を読んで、普通の人々が集団になるとなんでこんな狂気に向って行くのだろうかという疑問であった。異常を正常とに分けて、自分は正常のほうにいたいと考えて怪しまない態度を、限り無く怪しむ癖がいつのまにかついてしまった。まあ別に後悔しているわけではないからいいけれども、いまだに素直になれないところは自分でも如何ともしがたい。この性格が自分では気がつかない形で随分と損や遠回りをしているかも知れないと思うとちょっと鬱になる。

それなりに自己流に独学的にドイツ語の勉強をしてはいたが、ドイツ語をきちんと勉強するようになったのは、大学院に入ってからだと言える。ゼミで数年の間、カール・シュミットの『独裁』を読んだ。20代半ばから30代の半ば過ぎまでの10年余り、上智のブライテンシュタイン先生と毎週土曜日の夕方、ベッケンフェルデの法制史の論文などを読んだ。ここで18世紀ドイツの固有の性格をいろいろ教わったし、ドイツ語の読み方の基本を学んだように思う。お茶大に就職してからしばらくそれまでの生活と全く違ってしまい、ドイツ語を忘れてしまいそうな感じになり、ヤバイと思ひ、また上智のアルムブルスター先生ところで、先生が退職してプラハに行くまでの数年間、毎週木曜日アドルノの『否定弁証法』を読んだ。この二人が私のドイツ語の先生だったといえる。ドイツ語のニュアンスを生かす日本語の訳語を充てるコツを教わったように思う。

ドイツ語が多少読めるようになったなという実感を持つようになったのはごく最近のことである。2000年から2001年にかけて、ミュンヘンで10ヶ月過ごす機会を得た。ドイツの空気の中で日本語をできるだけ遮断してドイツ語の本を可能な限りたくさん読むことに決めた。日本語の本はいっさい持っていかなかった。政治と思想と歴史の本だけを読むことに決めた。3000ページくらい読んだ。これですこし学問的な意味での精神の平安が得られたような気がする。しかし東京に戻って来たら、とたんに読書の速度は落ちた。いまは「あの時間をもう一度」という思いである。

日本語の文章も下手で、語学音痴で語学コンプレックスの人間が言うのもなんだが、外国語を学ぶ意味は、日本語と日本文化をより相対的に理解する上での大きな効用があるように思う。

翻訳という作業はそうしたことの一切を含んでおり、その意味で、いい文章のいい内容の本を、きちんとした日本語でどう甦らせるか、という作業は、とても勉強になる。どうにも翻訳不能な意味やニュアンスをどう日本語で表現するか、これはその作業をする者の教養と経験を総動員しての挑戦である。だが、単なる翻訳とはまったく違った創造的な営みでもある。これは、英語の本を英語で理解する、ドイツ語の本をドイツ語で理解する、ということとはまた違った読み方である。

この違った読み方をもっと自在にできるようになりたいと思うのだが、道はなお果てしなく遠い。

言語と私

會川 義寛

まだ小学生低学年の頃、私は、大人同士の會話を聞いてもさっぱり理解できなかったことを自分で不思議に感じていた。大人は私とは別の言語を話している様な気がしたものだ。特に大人の女の人同士の世間話はわからなかった。今にして思えばこれは、會話の背景がわからなかったこと、會話者の心情が理解できなかったこと、會話における語彙がわからなかったことにより、それらを総合した結果、同じ日本語を聞いているにもかかわらず何を話しているのか理解できなかったのだと思う。のちに小学校上級生になって、ませた女の子同士が大人の女の口調をまねて話しているのを聞いたときなどは実に嫌な気がしたことを憶えている。

次にわからなかったのは、小学校で習う唱歌の歌詞である。「霞か雲か」とか「夏は来ぬ」とかの歌詞はあとにして思えば文語であるが、これがわからなかったので、歌うときどうも不安定な気がしていた。私は自分に理解できない言葉を、たかが歌詞とはいえ、自分の言語として自分の口から発するのが、何か嘘をついている様な気がして嫌だった。「落つるよ落つるよ真白き流れ」などという歌詞が今でも時に口について出てくるが、考えてみればこれも変な歌詞だと思う。それとも私の記憶違いなのだろうか。「函谷関も物ならず」なども歌っていて内心、嘘つけ！と思ってしまう。

言葉に関して強く意識し始めたのは古文・漢文を習い始めた高校生になってからである。これはまづ内容が面白かった。古文で最初に何かの例として出て来た和歌は「心当てに折らばや折らむ初霜の置き感ほせる白菊の花」というものであったが、嘘にしても何とも奇妙な出鱈目を言うものだなあと強く印象に残った。漢文は簡潔な中に面白い逸話や感動的な文が多かった。先に興味ある内容の文があり、それを憶えて、そこから自分で言い廻しの法則などを見出し出して文法を考えるという順で學んでいた様に思う。

英語の方はもっと早く中学から習い始めていたのだが、こちらは私の心の奥にはあまり影響を与えなかった様に思う。心のどこかで所詮自分とは関係ないものと思っていたのだろう。その理由の一端はおそらく英語の教科書の内容が全く詰まらなかったことにあっただろうと思う。アメリカ中産階級の生活を標準にした様な題材が多かった様に記憶するが、そんなものに私は全く関心がなかった。今にして思えば、たとえば数学などを英語で教える教科書などがあれば面白かったのではないかと思う。

大學の第二外国語にドイツ語を選んだのは、おそらく若いときの勘違いで何となくドイツ語は學問に直結した言語の様な印象を持っていたためだと思う。今でも憶えているが、大賀小四郎先生がドイツ語の先生だった。先生は我々學生をととても愛してくれた。「文化とは何かということ君達はよくよく考えねばならない。それが君達エリートの義務だ」と強調された。そして福田恒存の「私の国語教室」という書を紹介して下さった。私は自分をエリートだとは思わなかったがすぐにこれを買って読んだ。それからである、私の假名遣いが不可逆的に変化してしまったのは（本稿は前後の文に合わせて誤假名遣いで書いています）。

しかしいづれにせよ私は語學は得意ではなかった。図書館に行ったら高校のときの柔道部の一年先輩の黒川真一さんが勉強していた。覗いてみたらロシア語である。「何を勉強しているのですか」と訊いたら、「ランダウ・リフシッ

ツの教科書だよ。原書で読んでもよくわかって面白いのだよ」と言う。これはとても敵わないと思った。

第3外国語の中国語とフランス語もものにならなかった。やれば出来る様になるという変な自信だけはついて、結局こんなものやっている暇はないと思ってやめてしまった。のちにスペイン語やイタリア語、トルコ語なども少し囁いたが、いつもその場限りである。しかしこれらの言語は必要になったらそれほど苦労せずにある程度はできる様になると今でも思っている。辞書と會話入門書は持っているからだ。

さて、30歳になってからである。これから留學する先のアメリカの大學の教授（テキサス大學のAllen J. Bard教授）に手紙を書いたのだが、その英語の原稿を父の友人で長らくアメリカの大學の教授をされていた先生（武澤信一教授）に見て頂いた。私としては細かい英語の言い廻しなどを直して貰おうと（今から思えば不遜にも）思っていたのである。ところが先生は私の手紙を一読して、この手紙に書かなければならないことはこれとこれとこれである。先方の教授に依頼しなければならないことはこれこれである。それが明確にわかる様に書かなければならない、と優しく教えて下さり、英語に関しては後廻しであった。そう言われたら確かにその手紙が何の用で何のために書こうとしているのかが自分の気持ちも含めて大変明晰になった気がした。だがそのときは先生に対して特に感謝するほどの気持ちにはならなかった。しかしその後このときのことを振り返ると、私の英語自体がひどかったであろうことはともかく、不明瞭な論理の文を漫然と書いていたこと、並びにそれに気付いてもいなかったことを、穴に入りたいほど恥づかしく思った。先生も、自分の大學の後輩が學位を取って母校の助手になっていながらこの程度の文章もまともに書けないのかと情けなく思われたことであろう。先生はもう亡くなられてしまった。この時の御指導に関する感謝の気持ちを先生に伝えることができなかったことを私は大変申し譯なく思っている。

総じて言えば、私は人に物が言えるほど語學を修得できなかった。また職業として英語を必要としているにもかかわらず未だに自信が持てる様になっていない。これは自分による自分に対する英語の教育・訓練をきちんと行なわなかったことによる。私の英語に関する私自身への要求はそれほど高いものではないのだ。英語の論文が明晰に書ければよいのである。これはきちんと訓練すれば必ずできる様になるものだ。それを行なわなかったのは、もっと他の分野の勉強をしたかったのだらうと過去の自分を弁解したくなる。

余り必要性を感じない会話の上達はとっくにあきらめている。英会話は今程度でよいから、他の言語の会話がもう少し出来れば嬉しい。